

セ ボ ネ

クガヤ

ランティア

ネットワーク



SETAGAYA VOLUNTEER NETWORK

世田谷発！ ボランティア生活発見マガジン
<http://www.otagaisama.or.jp/>

2016.8 No.148

今月のトピック

特集●

音楽で育むチカラ～子どもたちの熱い夏～

まちの市民力！ ● ぬくぬくハウス

キラリ世田谷人 ● 田名 夢子さん



イラストレーション●井上八重子

80代の女流画家。

1973年から3年間、家族でフランスに滞在。グループ展・個展多数。国画会会員。

●わたしの世田谷

わたしは、からだを動かすときみしさがなくなり、絵を描いたり歩いたりしています。子どもたちが家を出てひとりの夕食に慣れず、外に出たのがキッカケ。だから何十年もの間、野川や海辺や公園を歩いている。雲の形をなぞり、若草色の林を通りぬけて今日咲き出したピンクの花に感動しながら、今日も歩いています。



楽器の技術向上だけでなく、豊かな人間性を育てている

く高3のシオリさんはとても仲良し。「ここに来るといつぱい友だちができる。いやになつたことはありません」といいます。女子が圧倒的に多く、5人のコントラバス奏者のうち、4人が女子です。受付など、スタッフとしてお手伝いをしている杉山さんは、卒団後、音大に通っていますが、オーケストラとは離れがたくアルバイトを志願しました。「卒団して、『もうダメ！ 行きたい！』と思つて。すごく好きだったんです。部活と違つて上下関係

が厳しくないし、家族のような雰囲気です。小さい子とは姉妹のようですね」と目を輝かせます。

この日、指揮をしていたのは、専門のバイオリンの指導も行ってきた三浦章宏さん。東京フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターです。「管楽器は初心者も多いですが、どんどん上手になつていきます。最初から関わっていますが、代がかわつても先輩が後輩に伝えていく。オーケストラはみんなできつていく素晴らしいものです」。ベートーベンの交響曲第一番第一楽章や、ベルリオーズ、グリーグの曲、楽器体験コーナーもある夏の演奏会で、練習の成果をぜひお聴きください。

日野皓正校長のもと、
中学生がジャズに奮闘

同じ日の午後、今度は池尻小学校体育館を訪ねると、「ドリームジャズバンド」(DJB、通称ド

リバン)の公開ワークショップが開かれていました。ドリバンのメンバーは、「ドリームジャズバンドワークショップ」(主催/世田谷区教育委員会、企画制作/世田谷パブリックシアター)に参加する世田谷区立中学校の生徒たち。4月に募集があり、開講式を経て、8月21日に世田谷パブリックシアターで行われるコンサートまで、4ヶ月間24回の練習に励みます。12年目となるドリバンは、日本を代表する世界的なトランペッターの日野皓正さんが校長、保坂区長が学園長です。

この日はトロンボーンの前片岡さん、トランペットの西尾さんらがアンサンブルを指導。片岡さんは「音が出るか出ないかではなく、ソウルがあるかどうかが大事。熱意がなければ振り向かれないでしょ? あとがない、失敗したら彼女がいなくなっちゃう! くらい気持ちで必死にならないければ!」と熱をこめます。



世界的ジャズトランペッター
日野皓正さん

最後に登場の日野校長。開口一番、「こんなひどいバンド、やめた方がいいよね。勝手にどっか探してやった方がいいんじゃない？ エライのはサポートスタッフ。絶対に無理だと思ったのを、必死になつて泣きながらやってきた。彼らは誇れる」「文化がなくなりつつあるこの世の中で、この子たちはいい方だ。でも意気込みが足りない」と超手厳しいお言葉。

「日野さん、あのお言葉は本心ですか？」と恐る恐る質問すると「当たり前ですよ。いのちを張っている以上、その気にならないと。あと11回しかないんだから」その気迫に、聞いている方もゾクッとします。

「日野さんにとってドリバンは特別なものですか？」「子どもの脳の能力は大人の何百倍もある。脳がフレキシブルで、血がたぎっているんです。やりがいがあつて今までやってきました。中学を卒業してやめていった子どもたちがサポートスタッフになつていて、これが素晴らしい。子どもは変わります。目を見ないで挨拶するから「目を見る」と言つたら目を見て話すようになった。子どもたちはすごい、こういうバンドは日本一だと思つてきたけどね」学校の先生にも親にも言われない厳しい、でも愛情あふれた言葉を、「第三の大人」から投げかけられたら子どもは変わるのでしょうか。

「いつもあんなに日野先生は厳しいの？」とリード・トランペットで頑張っていた黒田くんに問いかけてみると、「去年も1時間も怒られました」とあつさり。お姉さんもトランペットをやつていたという彼は「学校以外の友だちと



Dream Jazz Band

ひとつのものをつくり上げるのがドリバンの魅力」と語つてくれました。

「才から音とあそび、からだから声を出す

もうひとつは「世田谷ジュニア合唱団」。今年1月に開催された「新年の集い」で、日野原重明さん、湯川れい子さん、保坂区長が「音楽の持つちから」について対談をされた時、合間に素晴らしい歌声を聞かせてくれたのが、世田谷ジュニア合唱団。日野原さん、

湯川さんも「素晴らしい！世田谷の宝ですね」と絶賛でした。

ジュニア・オーケストラ、ドリバンが世田谷区の主権事業であるのに対し、合唱団は掛江みどりさんによって1992年に創立された民間の合唱団で、世田谷区社会教育登録団体となっています。2年に1度開かれる定期演奏会、例年は夏ですが、今年は12月11日に渋谷区のさくらホールで開かれます。今夏は新国立劇場のオペラ「夕鶴」の公演に選抜メンバーが児童合唱で出演することになっているからです。



身体を動かして音に親しむ

毎週水曜日の午後に行われる

レッスンを見学しました。1、2才のクラスから、小学校高学年、高校生のクラスまで年齢別に4クラスで構成されています。小さい子どもたちは体を動かすリズム遊びを通じて音に親しみます。「学校が早く終わって、うちにいるよりいいから、ここで宿題していたの」と話す小2の美南ちゃん。レッスンは始まると、指導の宮原先生のアシスタントのように小さな子どもたちの相手をしていました。クラスを指導する掛江先生が来られないこの日は、音大1年のOGがヘルプに入っていました。「おなかの体操」でおなかから声を出すことを学びます。女の子が圧倒的に多いのですが、小2の真輝くんは、中学生のお兄ちゃん共々、歌が大好き。「ここは男女分け隔てなくのびのびできるので、自信につながりますね」とお母さん。事務局を担っている岡田さんの娘さんは幼稚園の年長から高2までずっと続け、今は音大生。

「小さい時からずっと見てきている大人がいる、というのがいいですね。指導が時に厳しくても子どもは案外平気です。先生との信頼関係があるからでしょう」と岡田さん。子どもたちがメイクして晴れ舞台にあがる、12月の公演では「サウンド・オブ・ミュージック」やクリスマスソングを歌います。来年の区の「新年の集い」への出演もきまりました。

次の世代を育む音楽

オーケストラ、ジャズバンド、合唱団と活動はさまざまですが、いずれもプロの大人たちが本気で関わり、子どもたちは卒団した後もサポーターやアシスタント、指導者となって後輩たちに自分が学んだことを伝えていきます。世田谷で今精力的に取り組まれている、文化・芸術振興計画にとっても、大きな宝物だと実感しました。

(取材／編集委員 星野弥生)